

序 説

「Radiologists would be out of a job in 5 to 10 years. We should stop training radiologists right now.」これはトロント大学とGoogleで勤務するコンピュータ科学者のジェフリー・ヒントン氏が2016年に発した言葉である。AI時代を迎え、これまでの知見をAIにより効率的に使用していくツールを開発しつつあった画像診断学にとって、強烈な向かい風となる発言であった。特にわが国では画像診断医の不足が深刻で、昨今の画像診断報告書未確認問題なども社会を騒がせ、画像診断医が臨床現場を支える体制を強化すべく学会や各施設が取り組んでいるさなかのことであった。あれから4年が経過するが、仕事が減ることはまったくなく、むしろ次世代の画像診断への門戸が徐々に開かれつつある。AI時代を迎えるにあたり、重要なことは担い手となる次世代の育成である。画像診断の知識と経験をもち、柔軟にAIに対応していく若手放射線科医こそ、次の時代の宝であるといえる。

今回の特集では「地力が伸ばせる腹部画像診断」と題して、1月号にて「消化器・肝・胆・膵」領域、2月号にて「婦人科・腎・泌尿器」領域を中心に取り上げる。いわゆる腹部領域とは扱う臓器や疾患が多く、解剖学の知識也多岐にわたるため、往々にして画像診断初学者に敬遠されがちな領域である。内科医や外科医も各々の専門領域においては、ある一定の読影力をもち合わせており、画像診断を専門とする放射線科医としてはしっかりと基礎知識を身につけることが重要であろう。本特集では胃・十二指腸・小腸・結腸・肝・胆道・膵・直腸をテーマとして、画像からみる基本的な解剖学的知識と、遭遇する頻度の高い疾患を中心に解説する。本特集号から書面も完全リニューアルされ、座学のような解説は最小限に留め、画像のみるべきポイントがわかりやすく解説されている。特にこれから画像診断専門医を目指す方々にとってはティーチングファイルとして、すでに画像診断専門医を取得されている方々にはアトラスとして日々の読影に役立てば幸いである。

五島 聡